

『花鳥風月』における末摘花像について

金 賢 貞

一

『花鳥風月』は室町時代の絵入本である。題目の「花鳥風月」はこの話の中に登場する姉妹の巫女の名前で、「花鳥」は姉、「風月」は妹である。この二人の巫女が「はむろの中納言」邸で行なわれた「あふきあわせ」に呼ばれ、「伊勢物語」の在原業平やその他の登場人物、「源氏物語」の光源氏や末摘花などを口寄せによって呼び出す。そして、その人物達が巫女の口を借りて、いろいろな話をするという物語である。

末摘花の話は挿絵の第七図から出てくる。花鳥には光源氏の霊が、風月には末摘花の霊が各々乗り移る。風月に乗り移って現われた末摘花は次のように語る。

いつくへとて、おはするぞ、此世にてこそ、うとまれまいらせ候とも、めいとにては、あいねむの、しうしんのおにととなりて、かけのことくに、はなるましき物をとて、なおも御かけに、たちよりけり

末摘花は冥土で「あいねむの、しうしんのおに」となったと語っているが、このように末摘花が恐ろしい鬼になった理由については、

中々に、われ、六てうのゐんに、さふらひて、あまたのかすには、入候ひしかとも、なさへいやしき、よもきふの、かれくくなりし、ちきりのすゑ、うらめしければ、人しれす、ねたき心の、ありしかともと語っている。

さらに、その末摘花の亡霊は源氏をめぐる女性達についていろいろと語る。この話は葵の上から始まり、空蟬で終わっているが、いずれもその人に対する嫉妬や憎しみの感情がよく現われている。本稿では、このような末摘花の『源氏物語』の女主人公達への批評について考えてみたいと思う。まず、この部分の本文を引いてみたい。

あふひの上と、きこへしは、せつしやう大しやう大しんの御むすめ、ときめき給ふ御ことを、あさましとのみ、見しほと

に、ゆふきりの君を、うみをき、程なく、かくれ給ひし、う
れしきよ

むらさきの上と申せしは、ゆかりの草を、たつねつ、いと
けなきより、むかへとり、はこくみ給ひしことなれば、御心
さしも、たくひなく、ときめき給ふ、御こと、うら山しと
のみ、思ひしに、わかなのまきに、うせ給ひ、世のなけき、
さはけ共、われはそれ程、おもはず

花ちるさと、きこへしは、れけてんのいもうと、いとか
すならて、ましませは、いとをしと、をもへとも、よかれと
まては、おもはず

あかしの上は、中くうの、かくめてたきにつけても、あなつ
りにくくなりゆけは、き、見るたひに、すさましや

六てうのみやすところは、もの、けにあらはれて、よろつ
人の、あたとなる、ころのふかさも、をそろしや、なにと
おもふと、此人おにくさて、いかなかあるへき

女三のみや、ち、みかと、ことになしくしたまひて、かの
うき人に、ゆつりしに、えもんのかみの、おもふ事、けふり
くらへに、あらはれて、御心にも、いらざれば、人にはい
す、心には、をかしとき、て、さてすきぬ

御ま、は、の藤つほ、おほろ月夜の、御ことを、おもへは
ひちらさんも、なざけなし、さすか人の御ためも、いたはし
ければ、世かたりに、人もこそきけ、申まし

中にも、物のにくかりしは、ゆふかほの、むすめなりしをや
うくんとかしつき、ゆふやみのころとかや、か、り火すこし、
ともさせて、ひきさすことを、まくらにて、御うた、ねの、
つきなごよ

うつせみのあま君、かすにもあらぬ、人までも、さるそとき
けは、人しれす、しつとの心、ほのほとなりて、むねをやき、
あひねんのほむら、身をこかす

以上をまずまどめてみたいと思う。本稿で必要なのは、末摘花
の話の中に登場した女主人公とその女性に対して末摘花自身が抱
いている感情の言葉である。それを表にまどめてみると、次のよ
うになる。

葵の上	あさまし・かくれ給ひし、うれしきよ
紫の上	うら山し・うせ給ひ、世のなけき、さはけ共、 われはそれ程、おもはず
花散里	いとをしと、おもへとも、よかれとまては、お もはず
明石の上	すさまし
六条御息所	をそろしや・此人おにくさて、いかなかあるへき
女三の宮	(女三の宮の出家を) 心には、をかしと
藤壺	なざけなし
夕顔	物のにくかりし
空蟬	しつとの心、むねをやき、あひねんのほむら、 身をこかす

いずれも、その人に対する憎しみや嫉妬などの感情が露骨にあ
らわれている。しかし、それぞれの人物に対するこのような感情
も、実は二つの部類に分けることができる。

一つは、単にその人の不幸を笑ったり、幸せを妬んだりする
という、わりと客観的で第三者的な立場の感情である。この場合は、
末摘花の個人的な憎しみの感情はさほど感じられない。もう一つ
は、末摘花がその人に対して「にくい」という個人的な憎しみを
見せている人物達である。

前者にあたるのは、葵の上・紫の上・花散里・明石の上・女三
の宮・藤壺である。後者にあたるのは六条御息所・夕顔・空蟬の
三人であり、他の人物達に比べて憎しみの感情がよくあらわれて
いる方である。

前者にあたる女主人公達の特徴は、みんな末摘花より身分が上
か、同じぐらいの立場の女性達である。しかし、後者の方を見て
みると、六条御息所を除いた二人は、どちらも身分的には末摘花
より落ちるのに、自分よりは源氏に愛されている人である。空蟬
に対しては、特に嫉妬の感情が強い。空蟬は後で末摘花とともに
二条東院で源氏の世話を受けるようになっていたが、『花鳥風月』
に出てくる末摘花の亡霊は、彼女を「かすにもあらぬ」人と見て
いる。そのような人が自分と同じ待遇を受け、自分よりも源氏に
思われていることが許せなかつたのである。

つまり、身分が高い人の場合、源氏に愛されたり、良いことが

あるのは当然のこのように思い、あきらめることができる。し
かし、自分と比べて劣る人が、自分より源氏に愛されることは許
せないということであらう。

ここで、興味深いと思うのは末摘花の六条御息所に対する感情
である。嫉妬や執念と言えば、『源氏物語』の中では断然六条御
息所を誰もか思い浮かべる。末摘花の亡霊は、六条御息所が物の
怪になって次々と女主人公達に取り憑くほどの執念深さを「をそ
ろしや」と表現し、それゆえ「此人おにくさて、いかかあるへき」
と言っている。

しかし、末摘花は今自分がそのような身になっている。物の怪
となって人にとり憑いたりしてはいないものの、自分自身も今は
「執念の鬼」である。しかも、六条御息所は身分は極めて高いが、
源氏に愛されず、不幸な人生を送っている。ある意味では、自分
と同じような境遇を送った人として同情すべき人物かも知れない。
それなのに、紫の上や明石の上などのように源氏に愛され、栄華
を極めた幸せな女性達以上に憎い存在として受け取っているのは
興味深い。

二

次に私が触れてみたい問題は、『源氏物語』に登場する数ある
女主人公の中で、なぜ末摘花がこのような役割を担わされている
のかということである。吉崎志保子氏は、「鼻の先が赤いばかり

に人々からうとまれて、あはれにユーモラスな脇役の姫君を、嫉妬の鬼となして登場させ」たことを「なかなか心憎い趣向である」と述べられている(注1)。

確かに末摘花は、『源氏物語』に登場する女主人公の中では珍しく、その容姿が醜いことで有名である。そのためか、末摘花は一般的にユーモラスな存在として解釈されている。その末摘花がここでは「あいねむの、しうしんのおに」となって登場しているのは、非常におもしろい。

もちろん、『源氏物語』の女主人公の中で、多かれ少なかれ嫉妬や恨みの感情を持たない女性はおそらく一人もいないはずである。しかし、末摘花の物語を見ると、彼女は女主人公達の中でもわりと嫉妬や執念という言葉とは縁のない人物である。「あいねむの、しうしんのおに」となるほどの恨みを持ち、死んでからも亡霊の姿で源氏の影を追うという話にもつとふさわしい人物は、他にも大勢いる。さらに、末摘花の物語は、最後が幸せな結末となっており、この世に思いを残しているわけでもないのである。

このように末摘花は、他の女主人公に比べたら、むしろ「あいねむの、しうしんのおに」になるにはあまりふさわしくない人物と思われる。「花鳥風月」の作者は、どうして末摘花に、こんな役割を担わせたのであろうか。

『源氏物語』における末摘花について、もう少し考えてみる必

要がある。実際に『源氏物語』の中には、末摘花の考え方や感情などはあまり描かれていない。『源氏物語』における末摘花像は、光源氏や周りの人々の目から見た印象や考え方によって作られているのである。『花鳥風月』の作者も、それを分かっている、末摘花が「ねたき心」を「人しれず」持っていたと表現している。

『花鳥風月』の作者はおそらく、『源氏物語』の中でも末摘花という容姿が不器量で、非常に独特な物語を持つ女主人公に興味を持ち、『源氏物語』の中には語られていない彼女の深い内面世界を読み取ったのであろう。それは、他の誰よりもあわれで、切実な印象を作者に与えたのであろう。

末摘花の物語が幸せな結末を見ていることは確かである。源氏をひたすら待ち続けた甲斐があり、須磨から帰ってきた源氏から一生世話をされるようになるという、ハッピー・エンドの結末である。

しかし、それで彼女は本当に幸せになったのだろうか。彼女に約束されたのは「豊かな生活」ではあるが、けっして「源氏の愛情」ではなかったことに注目したい。光源氏が末摘花の面影を一生見たのは、彼女への「愛情」ゆえではなく、あくまでも「同情心」である。容姿がきれいでもない、しかも和歌などの風流も知らない無器用なこの女は、自分以外には誰からも愛されないという気持ちで源氏にあったのである。

これは、源氏の言葉から裏づけられる。雪の夜、久しぶりに末

摘花を訪ねてきた源氏は、翌朝雪明かりで末摘花を見て、その不器量に驚く。しかし、生活の貧しさやその醜い容姿に同情した源氏は次のように思う。

思ふやうなる住み処にあはぬ御ありさまは、とるべき方なしと思ひながら、我ならぬ人は、まして見忍びてむや、(「末摘花」 三六九頁)

このように、源氏が末摘花に対して持っていた感情はあくまでも同情心であり、これは末摘花が死ぬまで愛という形に変わることはなかつたのである。

源氏が末摘花の面剣を一生見るようになったのには、もう一つの原因がある。末摘花の亡き父である常陸の宮の力がそれであり、源氏もそのことは分かっている。

わがかうて見慣れけるは、故親王のうしろめたしとたくへおきたまひけむ魂のしるべなめりとぞ、思さるる。(「末摘花」 三六九頁)

源氏は、自分以外の人はおそらく末摘花との縁に辛抱してゆけないと思ひ、このような末摘花に自分を逢わせたのも、亡き常陸の宮の魂の手引きであろうと自ら認識しているのである。

さらに、須磨から帰還した源氏と末摘花との再会にも、この常陸の宮の力が働いている。花散里訪問の道すがら末摘花の邸のそばを通りかかる源氏に、ふと末摘花のことを思い出させたのが、常陸の宮の力であつたことは疑う余地がない。須磨から源氏が

帰つてきた後、頼る者もなく寂しい日々を過ごしていた末摘花は、昼寝の夢に亡き父である常陸の宮の姿を見る。

いとどながめまざるころにて、つくづくとおはしけるに、昼寝の夢に故宮のみえたまひければ、(「蓬生」 三三五頁)

源氏が彼女のことを思い出したのは、ひたすら源氏を待ちわびていた末摘花が昼寝の夢に父を見たその晩のことである。わずか一行ぐらいの描写に過ぎないが、このような幸せな結末の背後に常陸の宮の靈の力が大きく作用しているのである。

このように、末摘花の物語は幸せな結末を見せているし、「源氏物語」の中には末摘花自身の嫉妬や恨みなどの感情もあまり見えないが、だからといって必ずしも彼女が幸せだつたとは言えないのである。源氏が自分の世話をするのは自分への愛ゆえではなく、同情心や亡き父の力であつたということは、末摘花自身もよく分かっていたはずである。一生源氏からはもちろん、他の男の人にも愛されることはなかつた彼女が、「人しれず」さまざまな恨みや嫉妬の感情を持っていた可能性は高いと言えよう。

三

末摘花が亡霊となって登場する「花鳥風月」のことに言及している学者に、島内景二氏(注2)がおられる。島内氏は末摘花の二面性を指摘し、

末摘花は、心の表層と深層との二面性を維持したまま、一貫

した人間性を保っていたと解するのが自然ではあるまいか。作者ないし語り手が、彼女の行き方を笑い飛ばすか、同情するか、それは卷々の論理の問題でしかない。

と述べられている。

島内氏は、『花鳥風月』における末摘花像を逆に『源氏物語』に照らして、『源氏物語』における末摘花が本来持っていたかも知れない「執念」や「嫉妬」の念を読み取られているのである。さらに、末摘花の「からころも」の和歌三部作を取り上げ、それに込められている源氏への恨み、自分自身への後悔の念、光源氏をめぐる女性達への嫉妬心などを読み取られている。

確かに、「からころも」の和歌にはそのような末摘花の感情がよく現われている。

・ からころも君が心のつらければたもとはかくぞそほちつつの
み
（『末摘花』三七二頁）

・ きてみればうらみられけり唐衣かへしやりてん袖をぬらして
（『玉鬘』一三二頁）

・ わが身こそうらみられけれ唐ころも君がたもとなれずと思
へば
（『行幸』三〇七頁）

特に、「玉鬘」と「行幸」の二首は、須磨から戻ってきた源氏から一生の世話を受けるようになった後のものである。これは、豊かになった生活に満足しているわけではない末摘花の心をよく見せているものと解釈できよう。単に末摘花を滑稽な存在

として解釈をしている一般論に比べれば、これは確かに非常に鋭い読みであり、末摘花像をその内面から新しく解釈した興味深い説である。

しかし、室町時代にできた物語、しかもその存在感も非常に薄い絵入本の物語を『源氏物語』に照らし、『源氏物語』における末摘花の性格をそのようなものとして判断してしまうのも、非常に危険なことではないだろうか。

「わが身こそうらみられけれ」という和歌を末摘花は確かに詠んでいる。しかし、当時の和歌には涙や悲しみ、相手に対する恨みの言葉などがごく普通に使われており、この和歌だけをもって末摘花が恨みの感情を深く持っていたとは断言できないのである。当時を生きた女性にとつて、嫉妬や妬みの感情を全く持たない

のは、かえっておかしいかも知れない。末摘花も当然、源氏に愛されている女性達をうらやましく思ったり、物質的には豊かになつても、源氏の愛情には常に欠けている自分の状況を恨めしくも思ったりしたはずである。しかし、それも人柄と性格によつて、それを感ずる度合いは極端に違ってくる。

『源氏物語』に描かれている末摘花像からは「執念の鬼」として現われるほどの思いつめや執念深さはあまり感じられない。『源氏物語』の中に描かれている末摘花は、顔は醜くても、源氏を待ち続けた一途な心が最後には彼女を不幸から救い出すという、いわゆるハッピーエンドの物語のための人物であると思う。

『源氏物語』が書かれたのは平安時代で、『花鳥風月』の成立はそれよりはるかに時代が下る。当然のことながら、『花鳥風月』に書かれている末摘花像は、本来紫式部が描こうとしていた末摘花像とはさほど関わりのないものである。『花鳥風月』に「執念の鬼」として描かれている末摘花は、室町時代に生きた一人の作者が末摘花の中にそのような恐ろしい内面の可能性を見つけ、それを物語にしたまでのことであると思う。

島内景二氏も指摘されていること(注3)、『花鳥風月』には紫の上が「若菜」巻で死去しているとか、末摘花が生前六条院にいたなどの誤読が多く見える。はたしてこの『花鳥風月』を書いた作者が、『源氏物語』に対して正しい理解をしていた人であるかどうかとも疑問である。

いずれにせよ、『花鳥風月』で「あいねむの、しうしんのおに」となっている末摘花像からは、見過ごしがちである末摘花の内面の世界——彼女が自分の状況を不幸に感じ、源氏を恨んだり、源氏をめぐる他の女性達について深い嫉妬の心を抱いていたかも知れない——というおもしろい一面を見ることが出来る。ここに、『花鳥風月』における末摘花像の意義があるのではないだろうか。

《テキスト》

『室町時代物語大成』第三(角川書店 昭和五〇年一月) 所収、古活字版絵入「花鳥風月」(国会図書館蔵本)。

『源氏物語』(日本古典文学全集 小学館 一九九二年)

《注》

- 1 「末摘花の亡霊」(樹木) 吉崎志保子 昭和五二年四月
- 2 「嫉妬する末摘花」(國文學 第三八卷一一号) 島内景二 學燈社 一九九三年一〇月
- 3 注2と同じ

《参考文献》

『源氏物語必携Ⅱ』 秋山 虔・編 學燈社 一九九三年五月
「物語を織りなす人々」(『源氏物語講座2』) 勉誠社 平成三年九月

(キム ヒョンジョン 韓国伝統文化大学講師)

研究室受贈圖書雑誌目録Ⅲ

- 国語国文研究(北海道大学文学部国語国文学会) 一一四、一一五、一一六
- 国語国文学研究(熊本大学文学部国語国文学会) 三四、三三五
- 国語国文学誌(広島女学院大学日本文学会) 二九
- 国語・国文と国語教育(山梨大学国語国文学会) 七、八、九、一〇
- 国語国文論集(安田女子大学日本文学会) 三〇
- 国語と教育(長崎大学国語国文学会) 二四
- 国語の研究(大分大学国語国文学会) 二六
- 国際児童文学館紀要(大阪国際児童文学館) 一五